平成 29 年度　第 2 回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会　会議録

日　時：平成 29 年 9 月 28 日（木）18：30～20：30
会　場：練馬区役所 本庁舎 20 階交流会場

１．事務局長挨拶

本日は、通常と違うグループでの話し合いとなる。これは、前回の委員会できちんと説明ができなかったことに起因する。前回の委員会では資料が多く、資料の説明だけで精一杯となってしまった。本来であれば第５次計画の策定に向けて第４次計画の成果、それと第５次計画に向けてどうすればいいのか、ということをきちんと説明して、議論をすべきだったが、その時間が取れなかった。委員会後、職員レベルでもずいぶん話し合いをした。そこで、今回改めて、ネリーズの今後の展開や就労促進協会との統合も踏まえ、もう一度整理をするとともに、第５次計画に向けての方向性をグループで共有していきたい。

練馬区就労促進協会：「就労促進協会」よりは、「レインボーワーク」（以下、ＲＷ）のほうがなじみがあると思う。主に就労支援を行っている。来年４月には、社協と統合となるが、生活支援の得意な社協と統合することで、良い支援、良い連携ができると思っている。今日はその前段階ということで、良い議論を進めてきたいと思う。

２．配布資料確認

①レジュメ、②資料１、③ネリーズリーフレット、④ネリーズチラシ　※③④については委員のみ配布
リーフレットとチラシについては、改訂を予定しているので、意見があればいただきたい。

３．「第５次活動計画策定に向けて」（資料１）

委 員 長：事務局長から話があった通り、前回の委員会は、新しい委員も加わり、いろいろ話したいと思ったが、自己紹介で終わってしまい、なかなか議論を深める時間が取れなかった。ぜひ皆さんとじっくりお話する機会がほしいということで、集まっていただいた。第４次計画で、この「ネリーズ」が提案され、現在の登録者数は 388 名。第３次計画から第４次計画と進めていく中で、オール社協で取り組みを進めているという印象を受けるようになった。第５次計画に向けて、方向性はだいたい固まっているが、具体的な活動としてどうしていくか、あんなこともあるんじゃないか、ということを、どんどん出し合って、ざっくばらんに話し合っていきたい。きれいに話をしようというのではなく、自分が感じていること、思っていることを素直に出してほしい。
この策定・推進評価委員会の他に、ネリーズ勉強会準備会（以下、勉強会）というものを今年度４回開催している。そこに参加している委員２名より、参加しての感想や、思うことについて話していただきたい。

委　　員：勉強会には 3 回参加。そこでは、ネリーズを今後進めていく中で、そもそもネリーズってどんなことを目指したのだろう？という話をしてきた。
前回の委員会では、私から国から出されている「我が事・丸ごと共生社会（以下、我が丸）」の説明をした。話の後半のところで、「我が丸」と練馬の取り組みでは違いがあるか、という話をした。勉強会の中では、どう違うの？と聞かれて、いろいろ話をしたので、話のきっかけとして、そのことを話せればと思う。
　まずは、本日の資料「第５次計画に向けて」の中のキーワード『気づき、育ちあう』は、おそ

らくネリーズにたどり着く手前のところでは、どのように具体化するか、という議論の中から「ネリーズ」が出てきたと思う。そのことを検討するときに、ちょうど今日のようなグループディスカッションを行った。その際、事務局側はネリーズを「地域福祉推進協力員」と提案したが、前委員より「『協力員』だとお願いされたことをやるイメージ。そうではなく、気づき・育ちあうというのは、できることをどんどん増やしていこうとか、一緒にやりましょうというメッセージなので、『協働推進員』がふさわしいのではないか」との提案があった。あくまで、『協力』ではなく、『協働』ということが強調された。

副委員長から「こういうのが良いね」と話があったのは、障害のある方が地域にいるときにその障害のある方に課題があるのではなく、それを取り巻く地域に課題がある、それを住民の目線で解決していくということを「気づき・育ちあう」という流れの中で社協は大切にしてきたのだろう、ということを何度かお話しいただいた。そのような意味で、私自身の解釈として、ネリーズとは、「気づき・育ちあう」を具体化していく、なおかつ、「課題を解決する」というよりも、「地域の皆さんがお互いできることを増やしていく」という目線なのではないか、という話をした。あと、勉強会の中で確認したのが、委員が少し前の策定委員会の時に、「ネリーズって、『人』というよりも、『精神』というか『スピリット』なのではないか。」と言っていたことも確認した。要するに、ネリーズになった瞬間に、「ネリーズの人」「ネリーズでない人」と分かれるのではなく、「地域福祉する」とか、「人にやさしくする」とか、そういったスピリットを広げていくことが「ネリーズ」なのではないか、ということを委員は言いたかったのではないか、ということも共有した。

少々脱線するが、「我が事・丸ごと」という呼び名で施策が進んでいるが、「地域共生社会の実現」が正式名称。京都の事例を報告させていただく。京都では、災害時、要配慮者が一般避難所でも暮らせるようにしようという取り組みを進めている。一般避難所の端に要配慮者を集めるコーナーを作るのではなく、一般避難所の中で地域の方と当たり前に一緒に過ごせるような避難所にしていきたい。設備を整えていくよりも、「スピリット」のように人材養成に力を入れている。

要するに、要配慮者の方が一緒に過ごすためには、避難所で困ることはどのようなことかを知ってもらう、理解してもらうことに力を入れている。担当者が話していたのは、地域共生社会の考え方は、日常だけではなく、災害時にも使えるということ。今日は、グループディスカッションの中で、皆さんネリーズや第５次計画に向けて話をしてもらうが、「我が事」というと地域にある他の人の課題を、自分のことのように感じなさい、という印象があるが、人に問題があるというよりも、自分たちにできることを少しでも増やしていこうということを考えてきたように思う。

副委員長：前出の委員の話を聞いて、整理されたし、とても安心した。というのは、前回の委員会で「我が丸」の話を聞いたときに、すでに長い時間をかけてやってきたことが、いま国から降りてきて、その降り方が、戦時中の隣組のような、常に隣を気にしながら、自分を出せないというような、お互いに監視し合うような恐ろしさを感じてしまった。上から降りてくる共生社会を作ろうという動きが、住民相互の支え合いを強化するの「強化する」という言葉に反応した自分がいた。委員の話を聞きながら、私たちのやってきたことはそうではなくて、「気づき・育ちあう」「ゆるやかに見守りあう」ことを大事にしようということだと確認できた。

４回の勉強会というのは、委員２名と社協職員以外に、この委員会には関係していない介護、障害者支援関係の方も３名入っている。その方たちは、この委員会での話し合いを知らないし、ネリーズも知らない人達。だから、話し合いの中では、「ネリーズはいらないのでは」という投げ

かけがあったり、「いや、やはりいる。」という答えになったり、行きつ戻りつ、本当に良いのか考えた。住民主体とは何か、ということや、それぞれ感じているジレンマを話し合ったりしている。支援する立場の仕事をしていると、もっとこうしたいという思いがあっても、法的なしばりがありできないこともある。また、支援する、される側となると、責任問題はどうなるのかということも出てくる。

先日のネリーズ懇談会での脳梗塞の既往のある 80 代の方の話。芝居を見に行きたいが、ケアマネに反対されている。しかし、一緒に行く友達がいれば行けるのではないか。でも、その時の責任はどうなるのか、友達なら責任は取らない、という話になった。仕事でやっている部分と、ネリーズなど地域の関係の中でやることの違いは何だろう、という話題も出てきた。

今日は、委員長からも話があったように、話の脈絡を考えすぎることなく、じっくりとそれぞれの思いを聞かせてほしい。それを共有できたら良いと思う。これまでの懇談会でも、時間が足りないことが多く、光が丘も時間が足りなかったが、いつも怒っているおじさんを、車いすの青年がお茶に誘ったという話があった。最初は拒否していたが、何度も声をかけているうちに、おじさんはだんだん身ぎれいになっていった。話しかけにくい人に声をかける。この青年はネリーズ登録をしている。そのような事例を聞くことができた。懇談会は楽しいので、今日も懇談会のような雰囲気でみんなで話し合えたら良いと思う。

委 員 長：両委員の発表でほぼ網羅されたと思う。地域というと、自分のすぐそば、ご近所みたいなイメージがあるが、価値観の同じ仲間や趣味の仲間など、広い視野で捉えるとことによって、いろいろなつながりが新しく生まれてくると思う。地域を良くしたいというよりは、自分が自分らしく気持ち良く暮らしたいな、というところからいろいろなニーズが生まれてくるのだと思う。それをどうしたらいいだろう、一人ではできないが、つながっていける場があれば良いと思う。

地域のコーディネータ役になる住民と協働していくことになるが、そのような人材をすでに社協はたくさん知っているはず。その方が持っているネットワークをどのようにつなげていくかが大事になってくる。あまり難しく考えず、意見を出していただければと思う。

４．各グループより報告と共有

職　　員　　（３グループ発表）

３グループでは、３つの論点を分けず、全体的に話し合った。キーワードは「みんなが理解できるネリーズ」へ。前提として３つ挙げたい。前提①仕事としてやっている人（職員等）と、地元で生活している人のギャップが埋まっていると言えるか。仕事が終わって家に帰った時、どれだけ地域を意識しているか。そのギャップを埋めるのがネリーズなのではないか。前提②人情あふれていた昔、余裕がなく、見て見ぬふりがあふれている今、昔に戻ることはできないが、今できることをしているという芽が育っている。このような活動をしているのがネリーズなのではないか。前提③活動をしたい、できる、活動の場を待っている人はたくさんいるはず。きっかけが大事。委員長からも話があったように、地域にこだわらず、趣味や興味・関心がきっかけであれば参加しやすい。

３グループでは、ネリーズのいる地域を小学校に例えた。６年生がネリーズ、ＰＴＡがコーディネータとすると、ＰＴＡは子ども（つまり住民）のことを良く知っていて、子ども（住民）がやってほしいことを伝えられる。一人では言えないことも結束することで伝えられる。そうしたＰＴＡのような役割ではないか。先生は専門職。生徒、ＰＴＡ、先生が一丸となって小学校を過ごしやすい環境にしていく。まだまだ荒削りだが、今後の５次計画のイメージになると考えた。

職　　員　　（1 グループ発表）

１グループは、「地域とは何か」というところから話を始めた。周りの人とつながることで、協働して課題が達成できるという実践をした方から、「個」を大切にしないといけないとの話があった。

そもそも「地域」の範囲はどれくらいなんだろう、と考えた時、人を把握できる範囲が地域なのではないか、という意見が出た。地域の個人を把握できれば比較的幸せに暮らせるという実感を持ち、また社協と関わることで、地域生活を楽しむこととはどのようなことか知ることができた。広報誌からではなく、人づてで聞くことが必要だ。という意見があった。

ネリーズの活動は「自分サイズ」。やりたいからやる。それが住民主体という気づきを得たという方もいた。「自分サイズ」というキーワードも出た「自分サイズとは」＝自分が気持ちよくなる、自分の気が楽になるということ。

一方で、「ネリーズ懇談会は面白いが、活動家の集まり」という意見も出た。地域で眠っている人、懇談会には出てこない人の掘り起しが第５次計画の課題ではないか。という意見があった。

一人ぼっちではないと感じられることが大事で、できる範囲で愚痴を聞いてくれたり、アドバイスしてくれる人とつながっていることが大事。相談する場はいくつもあるが、そこが相談したいと思えるような場でないことに気付く力、相談したいと思っている人を包めるような場を作っていくことが大切という気付きを得た人もいた。

いろいろな層に働きかける工夫をすることも大事。抱えている問題を話せない人や抱えている問題をいきなり行政の窓口に苦情として挙げてしまう人、ネリーズ懇談会に「ヘビーネリーズ」として参加している人など、あらゆる層に向けて働きかけ、動機づけをしていくことがこれからますます必要になる。

ネリーズは登録することが最終目的ではない。ネリーズマインドを持っている人を増やすことが目的ということを再確認した。

職　　員　　（２グループ発表）

２グループは、第１次計画から第４次計画までのこれまでを振り返りながら話を進めた。第１次計画から４次計画に進む過程で、これまでは社協の一部の職員が進めていると感じていたことが、社協全体で取り組んでいると感じられるように職員の意識も変わってきた。社協職員も積極的に地域に出るようなり、地域の方から、他の部署の話を聞くことで、オール社協で地域に出ているという広がりを実感した。職員自身も心地良さを感じながら活動することができている。

地域に出てみると、まだまだ社協の役割は知られてないことを痛感する。ただ、私たちは、社協を知ってもらうために仕事をしているわけではなく、社協と関わることで誰かが地域や人とつながること、そのような取り組みが知られることが大切である。その意味で、ネリーズの存在は重要であり、ネリーズの活動をしている社協として広がると、ネリーズがネリーズを呼ぶことにつながる。

ネリーズがネリーズを呼ぶために大事な事。

①委員の意見。やっていて楽しいと感じながら活動できることが大事。楽しいと思えると、人に伝えてみよう、誘ってみようという気持ちになり、仲間が増える。ネリーズは数値で測れるものではなく、雰囲気で広がっていくもの。

②ＲＷの事例。地域の社長の中には、地域活動をしている社長が数多くいる。しかし、そのような社長をネリーズに誘っても断られるだろう。逆にどのような活動をしているのか、こちらから聞くことが大事。そうすることで「俺は（ネリーズには）ならないが、これがネリーズなんだな」と感じてもらえると思う。

ＲＷとの統合を見据え、働くことは夢のあること。職員自身が夢を語れるような組織になることで、就労面でも生活でもより良い支援ができるのではないか、との意見が出た。

５．まとめ

副委員長：１グループで「個を大切にしないと」との意見が出ていた。詳しく聞きたい。

委　　員：「地域とはどんなものか」という問いに対し、自分が活動している中で、民生委員や、子どもたちのお母さん、八百屋さん、パン屋さん、畑をやっている方とつながっていく中で子どもの支援ができていることに気付き、「地域」が認識できた。今まで地域と言われても、地域のために何をしたらよいのか、何をもって地域というのか、仮に質問されてもわからなかったが、自分の活動を通して、この人たちがいてくれるから活動できているのだと認識できた時に、初めて地域の大切さを知ったり、個と地域がつながった。

委　　員：自分が大切にされている感覚は大事だと委員の話を聞きながら思った。個が大切にされるといいなと思う。そのようなことを目指していける社会が良いと思う。

委　　員：各グループから出た話を聞いて、やはりこういう話し合いをして良かったなと思う。個にこだわったのは、時代が逆戻りして個が潰されてしまわないためにも、一人ひとりを大事にしながら支え合っていくことが大事だと思った。

「ネリーズは自分サイズ」自分そのものを大事にされること。障害がある、なしに関わらず、それぞれがその人。地域では社長でも、肩書を抜きにした一人の人間。これまで支援の対象だった障害のある人も、そうではなくやはり一人の人としてその人ができるところで活躍してもらいたい。地域では、社長も一人の人間として動いている。とても参考になると思った。

３グループのネリーズの仕組みを PTA に例えた話は、分かりやすかった。説明する際の参考にしたいので、うまくまとめて欲しいと思った。

昔が良かったというが、私たちは、今この時代に生きているので、できる範囲で無理せずにできたら良いと思う。

委 員 長：皆忙しいと思うが、今日このような場があって、いろいろな意見が聞けて良かったと思う。今までネリーズと関係なかった人、孤立している人、大変な思いをしている人をなくしていくためには、社協の仕掛けが必要。今の懇談会を続けていくにしても、そうでない仕掛けも必要。懇談会に多く顔を出す人を「ヘビーネリーズ」と表現した人がいたが、そのような人たちだけではなく、もっと裾野を広げていく必要がある。それは楽しいことでなければならないし、あるいはＷＩＮ－ＷＩＮの関係でなければならない。

第５次計画に向けていろいろな仕掛けを含めて考えていければと思う。本日はこれで終了となるが、また次回に向けては話し合いが続くので、今後ともよろしくご協力願いたい。

６．次回日程

日時：平成 29 年 11 月 21 日（火）18：30～20：30

場所：練馬区役所　本庁舎　地下多目的会議室

以　上